

イエスのみことばは、それが私たちの耳にはどのように厳しく聞こえようとも、そのみことばの前に頭を垂れて真実それを受け入れることが出来るとき、それは、私たちに福音の喜びをもたらすみことばとなります。

今日の福音のファリサイ派の人々に向けて語られたみことばも、私たちにとってはそのようなイエスの福音のみことばです。これらのみことばを福音として受け止めるためには、ファリサイ派の人々に向けて語られたこれらのみことばを、私たち自身のありようを指摘し、裁くみことばとして謙虚な心をもって受け止めなければなりません。福音書の中のイエスのみことばは、どれも、私たちのありようを裁くみことばです。何故なら、みことばを聴くとき、私たちはイエスが指摘しているとおりの自分自身のありようを認めざるをえないか、イエスが指し示すようには生きられていない自分を認めざるをえないからです。

みことばを聴くとは、イエスがそのみことばによって指摘している私たち自身のありようを謙虚に認め、その先にイエスが示す新しい生き方に向って、イエスに導かれて歩み始めるということです。私たちがそのことを受け入れることが出来るとき、イエスのみことばは私たちに喜びに満ちた新たな生き方に向けて導く福音のみことばとなるのです。

今日の福音に登場するファリサイ派の人々が、その生き方によって目指した世界は、私たちが知らず知らずのうちにその中にとつぷりと浸かって生きている、今も私たちが支配している価値基準に基づく世界です。そこでは、昔の人の言い伝えに基づく社会的規範がことの善悪、人の優劣を決定づける規範となります。今の私たちを取り巻く状況はもっと深刻で、今の私たちの社会の問題はそのような価値基準が崩れ、それに基づく社会的規範が効力を失ってしまっていることに原因があると私たちは心のどこかで思っています。けれども、そのような私たちのうちに、ファリサイ派の人々がその生き方を通して目指した、昔の人の言い伝えに基づく社会規範の再構築としての、掟遵守の社会の実現への郷愁が息づいていることに気付きます。けれども、まさにそのことによって、私たちは、ファリサイ派の人々が理想とした生き方に向って再び歩み始めることになってしまいます。昔の人の言い伝えに基づく価値基準と社会規範に基づく掟遵守の理想はそれがいかに妥当なものと思われよとも、イエスがもたらそうとしている福音に基づく生き方からは遠くかけ離れていることを、

今日の福音から私たちは学ばなければなりません。

昔の人の言い伝えを重んじて、社会規範としての掟遵守の理想に生きるファリサイ派の人々は、イエスの弟子たちの中に汚れたままの手で、手を洗うことをせずに食事の席に着く者がいるのを見て、「何故、あなたの弟子たちは昔の人たちの言い伝えに従って歩まず、汚れた手で食事をするのか」とイエスに詰問します。このような批判に対するイエスのみことばは、どこまでファリサイ派の人々の心に届いたのでしょうか。今日の福音を聴いた私たちの心にどこまで届いているのでしょうか。

イエスはイザヤ預言者のことばを引いて次のように言われています。

「この民は口先でわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。人間の戒めを教えとしておしえ、空しく私をあがめている。あなたたちは神の掟を捨て、人間の言い伝えを固く守っている。」

ここに、イエスの目に映っているファリサイ派の人々の姿があります。そして、そのファリサイ派の人々の姿は私たちのありようと無縁なものではありません。神の掟が私たちの心の深みにまで届かないとき、神の掟の深みが私たちの心を揺さぶることを止めるとき、昔の人の言い伝えは、神の掟との繋がりを絶たれ、人間の戒めに過ぎないものとなってしまいます。そしてそれは、人間の戒めであることによって、私たちの心の深みにまで届くことはなく、守るべき規律、規則となってしまいます。守るべき規律、規則が必要ないというではありません。それが悪いというではありません。けれども、人間の戒めに過ぎない規律や規則は、あまりにも表面的な規律、規則であることによって、心の深みに届くことなく、その前で心底私たちの頭を垂れさせる力を持ってはいません。それが力を持てば持つほど、表面的な規律や規則は、私たちの心に呼びかける神の掟に対して私たちの耳を閉ざさせてしまいます。こうして、私たちの社会の規範となった人間の戒めは、それを守れるか守れないかの目安となって、神の掟に代わって、人を裁く道具となってしまいます。神の掟を完全に守ってゆこうとする人間の善意から出発したはずの人間の言い伝えを抛りどころとする人間の戒めは、私たちの中から、神の掟がそこで働くはずの私たちの心の内面を閉ざしてしまうのです。今日の福音のファリサイ派の人々に向けて語られたイエスのみことばは、このようなことを指摘しています。そしてそのみことばは、このような時代を生きる私たちの心にも届くはずのみことばです。

神の掟はそれが神の掟であることによって、この世に生きる私たち全ての者にそれに従うことを求める普遍的な掟であることによって、その前にすべての私たちの頭を垂れさせるものです。誰も神の掟に完全に従うことは出来ません。自分の内面に立ち返って、真実自分を見つめるならば、誰でもそのことに気づ

くはずです。今日の福音のイエスのみことばは、私たちにそこに立ち返るよう  
に求めています。

人間の言い伝えに過ぎない人間の戒めは、それを教えるものと教えられる者  
とのとの間に断絶を生みます。何故なら、今日の福音に登場するファリサイ派  
の人々の姿勢が示しているように、それを教える者は、教えられた者たちが教  
えられたことを守っているかどうかには神経を尖らせなければならないからです。  
そのようにして、人の言い伝えに過ぎない人間の戒めは、教える者と教えられ  
る者との立場を固定化し、その双方に、神の掟の前に頭を垂れて、自らを省み  
る道を閉ざしてしまうのです。

今日も私たちは、神のみ前でそれぞれのありようを振り返り、神のみ前で等  
しく罪の告白し、赦しを求め合ってこのミサを始めました。主の祈りをともに  
唱え、神の赦しの恵みの中で互いに赦しあうことができることを祈り求め、神  
の愛と赦しの秘跡であるご聖体の近づくために、立場の違いを超えて平和の挨  
拶を交し合います。ここに、イエスが私たちを招いておられる世界があります。  
私たち全ての者の神の掟に従いきれない現実を知っておられ、そのような私た  
ちを愛をもって裁き、その裁きを真実受け入れる者たちを、愛の赦しの中に招  
き入れてくださるイエスの心に少しでも近づくことが出来るよう、このミサを  
ともにおささげしたいと思います。

高円寺教会主任司祭  
吉池好高